

研究論文 OECDのキー・コンピテンシーの理論的 根拠に関する一考察：「3つのカテゴリ -」に焦 点を当てて

著者	藤井 穂高
雑誌名	筑波大学教育学系論集
巻	42
号	1
ページ	1-12
発行年	2017-10
URL	http://hdl.handle.net/2241/00149169

〈研究論文〉

OECD のキー・コンピテンシーの理論的根拠に関する一考察

——「3つのカテゴリー」に焦点を当てて——

藤 井 穂 高

OECD のキー・コンピテンシーの理論的根拠に関する一考察 ——「3つのカテゴリー」に焦点を当てて——

藤井穂高

はじめに

今日、初等教育から高等教育まで〈新しい能力〉概念が提案され、教育政策等に大きな影響を与えているといわれる(松下 2010:1)。その際にしばしば参照されるのが OECD のキー・コンピテンシーである。たとえば、文部科学省の「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価のあり方に関する検討会」の「論点整理」(平成26年3月31日)では、キー・コンピテンシーは PISA 調査にも取り入れられ、「大きな影響を与えている」(9頁)と評されている。

その一方で、このキー・コンピテンシーの策定の過程では、その国際的な妥当性について多くの疑問や批判が寄せられていた。そのことは、OECD のキー・コンピテンシーに関する最終報告書が認めるところである(OECD 2003:63)。たとえば、策定の当初に論文の寄稿を依頼された人類学者の J. Goody は、キー・コンピテンシーは「役に立たない」と述べており(Goody 2001:187-188)、「不可能である」さらには「望ましくない」と考える者もいる(Keating 2003:143)。では、キー・コンピテンシーはどのように作られたのか。これが本論の出発点となる問いである。そして、キー・コンピテンシーの策定の過程を振り返りながらこの問いに応えることを本論の課題とする。

キー・コンピテンシーの策定を企図した OECD の試みは、DeSeCo プロジェクトと呼ばれている^①。DeSeCo とは、“Definition and Selection of Competencies: Theoretical and

Conceptual Foundations” (コンピテンシーの定義と選択: 理論的・概念的基礎) の略語であり、副題の通り「理論的・概念的基礎」を学際的に検討する点に特色がある。このため本論の課題は、教育施策における能力論の理論的根拠に関する比較研究の一環に位置づくと思われる。ただし、本論では、DeSeCo プロジェクトの試みのうち、キー・コンピテンシーの「3つのカテゴリー」に焦点を絞る。3つのカテゴリーとは、「道具を相互作用的に用いる」、「多様性のある集団の中で相互に関わり合う」、「自律的に行動する」である。ここに焦点を絞るのは、一般にキー・コンピテンシーとしてこの3つのカテゴリーが紹介されるという実際の観点と「理論的・概念的基礎」の検討の中心課題の1つが3つのカテゴリーという概念的枠組みであるという理論的観点による。

OECD のキー・コンピテンシーについては、今西(2008)、渡邊(2009)、奈良(2010)、宮嶋(2010)等の先行研究において、直接的な検討対象として取り上げられている。しかし、その作成過程を跡付ける形で検討されたものは管見の限り見当たらない。

そこで、本論では、まず、キー・コンピテンシーの概要を整理し、次に、キー・コンピテンシーの検討の経緯を振り返る。その上で、キー・コンピテンシーの理論的根拠を検討したい。

なお、素材としては主に DeSeCo プロジェクトのホームページに掲載されている諸資料を用いている^②。

1. キー・コンピテンシーの内容と「3つのカテゴリー」の意義

最初に、DeSeCo プロジェクトのねらいを確認した上で、キー・コンピテンシーの内容、「3つのカテゴリー」の意義を整理しておきたい。

(1) DeSeCo プロジェクトのねらい

DeSeCo プロジェクトのねらいは2005年の「概要」(Executive Summary)に簡潔にまとめられている⁹⁾。すなわち、その冒頭に掲げられた「人生の成功とよく機能する社会のために私たちはどのようなコンピテンシーを必要としているのか」という問いに答えることである。その趣旨はこの問いに続いて次のように説明されている。

「今日の社会は個人に挑戦的な要請 (challenging demands) を課しており、個人はその生活の多くの部分で複雑性 (complexity) と直面している。こうした要請は個人が獲得する必要があるキー・コンピテンシーにとって何を意味するのか。こうしたコンピテンシーを定義することにより、いかによく若者や成人が人生の挑戦のために準備できているかの評価を改善するとともに、教育制度や生涯学習の包括的な目標を同定することができる。」(OECD 2005 : 4)

ここに示されている「複雑性」を特徴とする現代社会の「要請」に応じたコンピテンシーを定義しその内容を選択すること、そうしたコンピテンシーが教育制度や生涯学習の「包括的な目標」となること、さらにそうしたコンピテンシーを評価できるようにすることが同プロジェクトの目論見である。

そして、そのための方法論として学際的なアプローチを採るとともに、事実から出発し機能的な方法を用いるよりもより一般的なレベルから出発し概念的で理論的な考察を展開しようとする点に同プロジェクトの特徴がある (Rychen 2001 : 4)。このため同プロジェクトでは参照枠 (frame of reference)、具体的には「コンピテンスの概念、キー・コンピテンシーの概念、高い価値を有する成果の明確な像、現代社会における生活の共通の要請、キー・コンピテンシーの

3要素のカテゴリー」を作ることに力点が置かれている (Salganik and Provasnik 2010 : 255)。

(2) キー・コンピテンシーの内容

一般にOECDの「キー・コンピテンシー」として参照されるのは、「概要」(2005)に示された3つの「コンピテンシーのカテゴリー」とそれぞれの理由と内容に関するものである。それによると、この3つのカテゴリーについて次のように説明されている。

「DeSeCo プロジェクトのキー・コンピテンシーのための概念的枠組み (conceptual framework) はこうしたコンピテンシーを3つの広範なカテゴリー (three broad categories) に分類している。第1に、個人は、環境と効果的に相互に関わるために広い範囲の道具を用いることができる必要がある。その環境とは、情報技術のような物理的なものと言語の使用のような社会的・文化的なもの両方を含むものである。個人は自分の目的に応じて道具を作り変えるために、すなわち道具を相互作用的に用いるために十分なほど道具を理解する必要がある。第2に、相互依存的な関係が深まる世界の中で、個人は、他者と関わる必要がある。様々な背景を持つ人々と出会うであろうから、多様な集団の中で相互に関わることが重要である。第3に、個人は、自分自身の生活を管理するための責任を持ち、自分の生活をより広い社会的な文脈に位置づけ、自律的に行動することができる必要がある。」(OECD 2005 : 5)

こうした「要約」の書きぶりを見る限り、それぞれの「カテゴリー」が「～できる」(たとえば、「広い範囲の道具を用いることができる」と記されているように、キー・コンピテンシーの「内容」とともに「カテゴリー」自体もコンピテンシーであるように読める。

なお、先行研究においては、この3つのカテゴリーは並列されているのではなく3次元座標のような布置を持つものである点、その中心に「省察性」(reflectivity)が位置づけられ社会化の圧力を対象化し再構成するための批判的なスタンスが担保されている点が指摘されているこ

ともここで確認しておきたい（松下 2010：21-22, 33）。

(3) 「3つのカテゴリー」の意義

それでは、なぜこうした「3つのカテゴリー」は、キー・コンピテンシーの「内容」とは別に、設定されているのだろうか。

DeSeCo プロジェクトは2003年に最終報告書を出しているが、まず着目したいのが、その序章において、「本書では、要請に応じたコンピテンシーが3要素のカテゴリー化（three-fold categorization）に概念化される枠組みを描く」（Rychen and Salganik 2003：3）と記されている点である。つまり、キー・コンピテンシーを3つにカテゴライズすることが同報告書の課題であると明示されているのである。

同報告書においてキー・コンピテンシーの中身を論じた D. S. Rychen の論文（以下、「Rychen 論文」）によると、キー・コンピテンシーは、ウェバー的にいえば「理念型」であり、「すべての潜在的なキー・コンピテンシーを記述し、配置するための、またそれらをより広い理論的な基礎に概念的に結び付けることでキー・コンピテンシーの説明力を高めるための概念的基礎又は道具を提供している」（Rychen and Salganik 2003：84）と説明している。この点は、先の「概要」（2005）において「こうしたカテゴリーは、それぞれに特有の焦点を持ち、相互に関係し、全体としてキー・コンピテンシーを同定し配置するための基礎を形成する。」（OECD 2005：5）と説明されていることと一致する。

さらに、DeSeCo プロジェクトの委員長を務めた H. Gilomen は、2002年に開催された第2回 DeSeCo シンポジウムの報告書の「結論」において、こうしたカテゴリーは理論志向で学際的な分析と省察の成果であり、主に DeSeCo への多様な学問的貢献から生まれたものである点を改めて強調したうえで、次のように述べている（Gilomen 2003：204）。

「キー・コンピテンシーのカテゴリーと特定されたキー・コンピテンシー自体には重要な違いがある。カテゴリーは完結したひとそろいであり、他に加えるべきカテゴリーはなく、キーで

あるいかなるコンピテンシーもこの3つのカテゴリーの1つに当てはまることを意味するものであるのに対し、暫定的なキー・コンピテンシーは定義上の基準に合致し、現時点で最も明白であるように見えるものにすぎない。」

ここでは、「カテゴリー」は「内容」とはっきりと区別されており、内容の暫定性と対照する形でカテゴリーの完結性が強調されている。

2. DeSeCo プロジェクトの経緯と「3つのカテゴリー」のゆらぎ

次に、DeSeCo プロジェクトの経緯を簡単にまとめたい。まず、「3つのカテゴリー」の作成の過程を振り返るとともに、キー・コンピテンシーの学際性の内実を検討する。

(1) DeSeCo プロジェクトの経緯における「3つのカテゴリー」の検討

DeSeCo プロジェクトの全体の経緯は、その背景報告書（OECD/SFSO 2001b：10-11）及び最終報告書（Rychen and Salganik 2003：6-11）等を示されている。それらによると、DeSeCo プロジェクトでは、従来の研究のレビュー、コンピテンシー等の概念の解明、哲学、人類学、心理学、経済学、社会学の各研究者による寄稿とその寄稿論文に対する他の研究者のコメント、各国（12カ国）の報告書（国別報告プロセス、CCP）を踏まえた知見の総合と、2回のシンポジウム等を経て、2003年に最終報告書がまとめられている。

こうした経緯の中に「3つのカテゴリー」の由来を探し求めてみると、先の H. Gilomen が語っていた「完結性」のイメージとはかなり異なる相貌が明らかとなる。それを表にまとめると次の表1の通りである。

こうして並べてみるとわかることがいくつかある。第1に、カテゴリーの名称は2000年の国際教育インディケータ事業（INES）の総会での報告において初めて現れるが、その後の展開を見てもそれほど変わっていない。つまり、この時期にすでにできていたと言える。第2に、この当初の案では、この3つの内容は、「カテゴリー」ではなく、「キー・コンピテンシー」として

表1 「3つのカテゴリー」の用語の変遷

日付	資料	内容
1999.1.15.	年報1998 (OECD/SFSO 1999)	“generic”も“three categories”もなし。
1999.10.13-15.	第1回シンポジウム背景資料 (OECD/SFSO/NCES 1999)	“generic”も“three categories”もなし。
2000.5.31.	年報1999 (OECD/SFSO 2000 : 7)	“generic”も“three categories”もなし。「コンピテンスのいくつかの一般的な領域」(some general areas of competence)。
2000.9.11-13.	INES総会での報告	「3つの汎用的なキー・コンピテンシー」(three generic key competencies)。その内容は「自律的省察的に活動する」, 「相互作用的に道具を用いる」, 「社会的に多様な集団の中に参加し役割を果たす」。
2001.3.20.	年報2000	「3つの汎用的なキー・コンピテンシー」
2001.	『キー・コンピテンシーの定義と選択』	「3つの広範なカテゴリー」(three broad categories)として, 「自律的省察的に活動する」, 「相互作用的に道具を用いる」, 「社会的に多様な集団の中に参加し役割を果たす」。
2001.12.	背景報告書	“generic”も“three categories”もなし。
2002.1.	第2回シンポジウム討議資料 (Rychen and Salganik 2002 : 14)	「3つの構成概念」(three constructs)。その内容は「自律的に活動する」, 「相互作用的に道具を用いる」, 「社会的に多様な集団の中に参加し役割を果たす」。「3つの広範なカテゴリー」という用語も。3つの構成概念は「汎用的」なものあるいは理念型と考えられるべきものと説明。
2002春	年報2001 (OECD/SFSO 2002 : 4,6)	「3つの汎用的キー・コンピテンシー」はOECDの国際教育インディケータ事業の第4回総会で提案されたもの, 「キー・コンピテンシーの3つのカテゴリー」は2002年の第2回シンポジウムでRychenから報告されたものと説明。
2002.2.11-13.	第2回シンポジウム報告書 (Rychen 2003a : 112)	「キー・コンピテンシーの3つのカテゴリー」。その内容は「自律的に活動する」, 「相互作用的に道具を用いる」, 「社会的に多様な集団の中に参加し役割を果たす」。
2003.	最終報告書 Rychen 論文 (Rychen and Salganik 2003 : 83)	「3要素のカテゴリー化」(three-fold categorization), 「3つのカテゴリー」。
2005.	『キー・コンピテンシーの定義と選択』(概要) (OECD 2005)	「3つの広範なカテゴリー」。“generic”なし。

想定されていた。第3に、翌年の最初の報告書『キー・コンピテンシーの定義と選択』以降、これらは「カテゴリー」と呼ばれるようになる。第4に、当初は「汎用的」との形容詞がついており、その後「3要素の」(three-fold)という形容詞が現れるが、最終的には「広範な」というもっとも内実の薄い形容詞が選択されている。

より詳しく見てみたい。最初に「3つの汎用的なキー・コンピテンシー」という言葉を用いたINESの総会での報告においては、当初に寄稿が依頼された5人の研究者の提案をまとめたうえで、「いくつかの共通の考察及び議論はこう

した学問分野志向型のアプローチの多様性を超えるものである。私たちは5点の専門家の報告書において同定されている多くのキー・コンピテンシーを包含する3つの汎用的キー・コンピテンシーを同定した。」とされるが、「汎用的」(generic)という形容詞についても、「3つ」の根拠についても、説明はない (Rychen and Salganik 2000 : 11)。

次に最初の報告書である『キー・コンピテンシーの定義と選択』(2001)を見てみると、やはり5人の論文を簡単にまとめたうえで「キー・コンピテンシーの中身に焦点を当てるなら

ば、3つの広範なカテゴリーが、環境との効果的な相互作用のために必要なものあるいは望ましいものとして著者らにより特定された特徴の多くを含むと仮定することが合理的であると思われる。」と述べられるものの (Rychen and Salganik 2001 : 12)、なぜ「3つ」の「カテゴリー」なのかについては説明がない。ただし、ここには注(注4)が付されており、「これらのカテゴリーはDeSeCoプロジェクトの中で様々な機会に汎用的キー・コンピテンシーとして提案されてきたものである」との説明がある。しかし、それまでの資料を見ても、少なくともDeSeCoのホームページに掲載されている資料を見る限り、どこに「様々な機会」があったのかは窺い知ることはできない。先の表において、「“generic”も“three categories”もなし」と記しているのはその確認のためである。

また、2002年1月付の第2回シンポジウム討議資料においても、「多様な専門家の寄稿論文の分析と協議に基づいて、私たちは現代生活の複雑な要請に関連するキー・コンピテンシーの3つの広範なカテゴリーを同定した」、「3つの構成要素は抽象化の非常に一般的なレベルに位置づけられるものであり、汎用的(特定のものを提供するものではないという意味で)あるいは理念型として考えられるべきものである」と同様の説明が繰り返されるのみである (Rychen 2002

: 14)。

以上の経緯の検討からは、「3つのカテゴリー」のそれぞれの名称については比較的早くからできていたものの、それとは対照的にそれらが「3つのカテゴリー」として括られるまでにはかなりの揺らぎが認められ、かつ、その「理論的根拠」については明示されていないと言わざるを得ない⁶⁾。

(2) キー・コンピテンシーの学際性の内実

キー・コンピテンシーの内容は、一般には「概要」(2005)のそれについて言及されるが、その元は最終報告書(2003)のRychen論文に示されている⁶⁾。ここではRychen論文に引用されている論文とその回数を整理することによって、同論文で示されたキー・コンピテンシーの理論的基礎の特徴を検討したい。引用文献を筆者の観点で4分類にまとめたものが次の表2である。なお、表のうち分類の記号は、“A”が当初に寄稿を依頼された5人の論文、“B”は2001年に刊行された最初の報告書(Rychen and Salganik 2001)の所収論文、“C”は第2回シンポジウムの報告書(2003)所収論文、“D”はその他を表している。

たしかに多様な研究領域の研究者の論文が参照されていることから、学際的な性格は明らかである。が、同時に、引用論文には偏りあることも明らかである。当初の5人の研究者による

表2 Rychen 論文における参照論文とその被引用回数

参照資料	被引用回数	分類	参照資料	被引用回数	分類
Canto-Sperber and Dupuy (2001)	14	A	Trier (2003)	8	C
Haste (2001)	14	A	Oates (2003)	2	C
Perrenoud (2001)	14	A	Quane (2003)	1	C
Levy and Murnane (2001)	5	A	Riordan and Rosas (2003)	1	C
Goody (2001)	2	A	Stein (2003)	1	C
Kegan (2001)	9	B	Bourdieu (1980, 1982)	2	D
Ridgeway (2001)	4	B	OECD (1999, 2001)	2	D
Rychen and Salganik (eds) (2001)	3	B	Stein (2000)	2	D
Carson (2001)	2	B	Gal et al. (1999)	1	D
Weinert (2001)	2	B	Goleman (1996)	1	D
Callieri (2001)	1	B	Sennett (1998)	1	D
Delors and Draxler (2001)	1	B	World Bank (2002)	1	D

寄稿論文からもっとも多く参照されているのは対照的に、第2回シンポジウムの寄稿論文集から参照されている論文は5件だけであり、このうちU. P. Trierのものは国別報告プロセスのまとめである。キー・コンピテンシーの中身の議論は当初の寄稿論文によって作られており、その後、大きな変更は加えられていないことを物語るものである。多く引用されている分類Aの各論文については、後に改めて検討する。

3. 「3つのカテゴリー」の理論的基礎

ここでは本論の中心的課題である「3つのカテゴリー」の理論的基礎を検討したい。最終的な「要約」(OECD 2005)には3つのカテゴリー(「要約」では正確には「3つの広範なカテゴリー」)がなぜそうなのかについての説明はなく、また、「3つの広範なカテゴリー」に落ち着くまでには相当の用語上の揺らぎがあったことは前述のとおりである。ここでは3つのアプローチを試みる。第1は、「要約」の元であるRychen論文の検討、第2は、当初の5人の研究者による論文に遡った検討、そして、第3は、国別報告書の検討である。

(1) Rychen論文の検討

最終報告書のRychen論文には、3つのカテゴリーに関する言及が5か所ある。1つひとつ引きながら検討を加えたい。

第1に、同論文においても、先に見たH. Gilomen (Gilomen 2003: 204)と同様に、3つのカテゴリーとそこに含まれるキー・コンピテンシーの違いが次のように示されている。「キー・コンピテンシーのカテゴリーは、主に当初の研究者による寄稿論文とそれに続く学際的な省察に基づく演繹的なアプローチによって構成された。対照的に、この3つのカテゴリーの中で光を当てられたキー・コンピテンシーは、すでに確立された定義、規範、概念に関する各基準に照らしてプロジェクトの全体を通じて考案された多くのリストの検討の結果である。」(Rychen 2003b: 85)。

第2に、同論文では、複雑な精神的要請への応答としての省察性という概念とキー・コンピ

テンシーのための3要素によるカテゴリー化は、意見交換、議論、分析的、創造的な作業の結果であり、DeSeCoプロジェクトの多分野の専門的な視点から学際的な理解と理論化への重要な移行を表すものである、と述べられている(Rychen 2003b: 74)。この点も第1点と同様にアプローチに関するもので、手続き的な正当性を示すものであろうが、3つのカテゴリーの内容の妥当性を示すものではない。

第3に、キー・コンピテンシーの3つのカテゴリーの概念化については、DeSeCoに関わった研究者の抽象化と理論化に多くを依存している、として次のように説明される。たとえば、「社会集団に参加し、それを形成し、その中で効果的に働く能力」はC. Ridgewayによって「真に普遍的なキー・コンピテンシー」として提示されたものであり、「自律的な行為者」という概念はP. Perrenoudの論考の中心であり、「道具を使う人」というモデルはH. Hasteによって発展されている。これらの概念やモデルはこうした特定の論考において主に練り上げられているが、同じ特徴はほかの論考においても見いだされる、と(Rychen 2003b: 83)。こうした説明は、3つのカテゴリーのどれか1つの根拠を示すものであるが、なぜ3つで完結するものなのかの説明とはなり得ない。

第4に、「3つのカテゴリーの構成に特に関連があると示された概念的要素あるいはモデル」として、次の5点が言及されている。すなわち、個人と社会の関係を弁証法的で力動的なものとしみならずような理解、道具という考え方、環境を社会的領域により構造化されたものとする理解、省察性の概念の基礎にある精神発達の進化モデル、キー・コンピテンシー概念に含まれる必要な適合過程である(Rychen 2003b: 83-84)。しかし、このいずれも3つのカテゴリーの根拠に関わるものではない。

こうしてみると、同論文において、なぜ3つのカテゴリーなのかについて言及しているのは、次の一文しかない。すなわち、「最も基本的なレベルにおいて、生きるということは自ら行動すること、道具を用いること、他者と相互

に関わることを含意する。」(Rychen 2003b : 83) という文章である。この「生きるということ」の「もっとも基本的なレベル」が演繹的アプローチの出発点になると想定されていると思われるが、これは理論的根拠と呼べるものであろうか。

なお、この3点に、「現代生活が必要とするレベルでの精神的複雑さ(省察性, reflectivity)」を組み合わせることでキー・コンピテンシーの内実が規定されることになるが(Rychen 2003b : 83)、この「省察性」は重要なポイントであり、本論とは別に論じる必要がある。

(2) 当初の5人の研究者による論文の検討

次に当初の5人の研究者による論文を検討したい。「3つのカテゴリー」の作成経緯においてみたように、また、Rychen 論文における被参照数からも明らかのように、キー・コンピテンシーの内実を作る際に、当初の研究者の論文の果たした役割は極めて大きい。各論文のコンピテンシーの内容構成をまとめると次の表3のようになる。

人類学者である J. Goody はそもそも国際的な妥当性を有するキー・コンピテンシーという考え方に否定的であるため、具体的な内容を示し

ていないが、他の4人の論文を見ても、「3つのカテゴリー」のどれか、あるいは、カテゴリーの中のキー・コンピテンシーの内容に該当するものはあるにせよ、「3つのカテゴリー」を直接的に提案しているものはない。

しかも、興味深いことに、DeSeCo の1999年版年報には、この5人の報告を受けたまとめが掲載されており、その中ではコンピテンシーの「いくつかの一般的な領域」として、「集団に加わる、集団を形成する、集団の中で機能する」、「刷新、継続、複雑さのマネジメント」、「肯定的な自己概念」、「省察的な行動と批判的思考という意味での自律性」の4領域に整理されている(OECD/SFSO 2000 : 7)。つまり、同じ5人の報告に基づいてもそのカテゴリーの作り方は異なるのである。むしろ、このまとめの方が5人の報告から帰納的に作られている分、わかりやすいとも言える。

一方、個別の論文をより詳細に見るならば、その後のキー・コンピテンシーの作り方に影響を与えたと推察できるものもある。たとえば、M. Canto-Sperber and J.-P. Dupuy 論文では、「コンピテンシーの5つのクラスター」を5次元でとらえることも提案されている。たとえば、

表3 当初の寄稿論文に見られるコンピテンシーの内容構成

著者	コンピテンシーの内容構成
M.Canto-Sperber and J.-P.Dupuy	よい人生に必要とされる「コンピテンシーの5つのクラスター」。 ①複雑性に対処する(パターンを認識する)、②知覚に関するコンピテンシー(関連する特徴とそうでないものを区別する)、③規範に関するコンピテンシー(一定の目的に達するために適切な方法を選ぶ、示された様々な可能性を識別する、道徳的な判断を下す)、④協力に関するコンピテンシー(他者と協力する、他者を信用する)、⑤語りに関するコンピテンシー(自分や他者の人生で起きることの意味を考える)
J. Goody	(なし)
H. Haste	「5つのキー・コンピテンシー」。 ①変化していく技術を吸収し社会的実践に適合させる、②曖昧さと多様性に対処する、③共同体の結びつきを見出し維持する、④動機づけと感情を管理する、⑤道徳性、責任、市民性に焦点を当てる
F. Levy and R. Murnane	①読解と数学の技能、②話し言葉と書き言葉のコミュニケーション能力、③多様な社会集団の中で生産的に働く技能、④感情的知性、⑤情報技術への親しみ
P. Perrenoud	キー・コンピテンシーとは次のことができることである。 ①自分の持っている資源、権利、限界を同定し、評価し、守る、②個人的及び集団的に計画を作成、実施し、戦略を開発する、③状況と関係を分析する、④協力し、協働し、リーダーシップを共有する、⑤集団での活動の民主的な組織及び制度を築き動かす、⑥争いを管理し解決する、⑦規則を理解し、適用し、作り上げる、⑧文化的な相違を超えて調整された秩序を築く

他者を信頼する能力は協力に関するコンピテンシーに位置づけられるが、規範、知覚、複雑性の次元とも関係がある (Canto-Sperber, M. and Dupuy, J.-P. 2001 : 78)。こうしたとらえ方は、「3つのカテゴリー」を3次元ととらえる「概要」の見方と同じである。あるいは、H. Haste 論文では、「5つのキー・コンピテンシー」が示されているが、それらは「汎用的」なものであるとされており (Haste, H. 2001 : 116)、こうしたとらえ方も当初の汎用的なキー・コンピテンシーというとらえ方に影響を与えたと推察することもできる。

(3) 国別報告書の検討

最後に国別報告書を見ておきたい。DeSeCo プロジェクトでは、キー・コンピテンシーの策定の過程で OECD 諸国の取り組み状況等を聴取するため、「国別報告プロセス」(CCC)を取り入れている。その意見聴取項目の中に、DeSeCo の「汎用的キー・コンピテンシー」に関する評価も含まれている。同プロジェクトの委員長である H. Gilomen は、国別報告書が3つのカテゴリーの中でキー・コンピテンシーを特定するための重要な資源となったと位置づけているが (Gilomen 2003 : 205)、その中身を見ると3つのカテゴリーの由来を「推測」するうえでも参考になる。

その由来を検討する前に、各国の報告書をまとめた報告書 (Trier 2001b, Trier 2003) から、興味深い点を取り上げておきたい。

まず、DeSeCo の「汎用的キー・コンピテンシー」に対する各国の評価である。U. P. Trier の報告書によると、その評価は3つの立場に、しかもちょうど3等分されるように分かれる。第1は、汎用的コンピテンシーは非常に一般的で高い抽象度で集成されているため、コンピテンシーを定義し選択するという実際的な目的にとっては役に立たないという「否定的」評価、第2は、汎用的コンピテンシーはキー・コンピテンシーを省察し、さらなる議論のためのよいスタートとなるという「中立的」評価、第3は、汎用的コンピテンシーはキー・コンピテンシーを概念化するための根拠の確かで確固とした基

礎であるとする「肯定的評価」である (Trier 2001b : 49-50)。このように各国の評価は一樣ではなく、必ずしも肯定的なものが多いとは言えないことは確認しておく必要がある。

また、国別報告書の総括から浮かび上がる論点の1つとして、「コンピテンシーをコンピテンシの領域に集成する (aggregation) という課題」が挙げられている点にも着目したい。つまり、各国の報告書において、コンピテンシーの集成は、階層的秩序を意味する場合、分類を意味する場合、帰納的に関連するコンピテンシーをグループ分けすることを意味する場合と様々であり、こうした多様な集成のアプローチは、DeSeCo が提案している「汎用的コンピテンシー」との関係を考察しようとする際に困難を生じさせるという指摘である (Trier 2003 : 32)。

さて、次に「3つのカテゴリー」の由来について、国別報告書に基づき「推測」してみたい。Trier の報告書によると、汎用的コンピテンシーと各国の包括的な目標のカテゴリーとの間に類似点があると報告している国として、オーストリア、ドイツ、スウェーデンとスイスが挙げられている (Trier 2001b : 29)。このうちスウェーデンについては、その国別報告書では「スウェーデンの学校はコンピテンシの発達のための多くの前提条件を自然に有している。」と書かれているのみであるが (National Agency for Education 2001 : 6)、他の3か国は具体的な記述がある。

たとえば、スイスにおいては、教育目標の改善の過程で、1984年にスイス中央部の教育長らは中等学校の指導理念において、ロート (H. Roth) の3つ組 (triad)⁹⁾、すなわち、個人コンピテンシ、社会的コンピテンシと事実コンピテンシをその基本構造として採用した (Trier 2001b : 4)。ドイツにおいても、普通教育と職業教育の峻別を克服する過程でコンピテンシという考え方が着目され、「もっとも影響力のある考え方」として、ロートの三角形 (triangles) が示されている (Witt and Lehmann 2001 : 14)。また、オーストリアにおいては、同国における人格的コンピテンシー、方法的コンピテンシー、

社会的コンピテンシーという体系的な概念定義が、3つの汎用的タイプのキー・コンピテンシーとの類似性を示している、と報告されている(Lassnigg, Mayer and Svecnik 2001:30)。

こうしてみると、DeSeCoの「3つのカテゴリ」の背景には、DeSeCoプロジェクトを担当したスイス連邦統計局を含むドイツ語圏の考え方があってはならないかと推測することができる。

おわりに

本論では、わが国においても「大きな影響を与えている」とされるOECDのキー・コンピテンシーのうち、「3つのカテゴリ」に焦点を当て、その作成の経緯を振り返りながら「理論的・概念的基礎」の内実を検討しようとした。

まず、キー・コンピテンシーの「カテゴリ」について見るならば、当初、3つのカテゴリ自体が「汎用的なキー・コンピテンシーとして説明されていたが、最終的には「広範なカテゴリ」として決着する。しかしこの「カテゴリ」は、たとえば当初の5人の寄稿論文の1つであるCanto-Sperber and Dupuy (2001)の「クラスター」のようなキー・コンピテンシーが含まれる領域を指すというのではなく、それ自体がキー・コンピテンシーのように読める。実際、参照される場合、「3つの広範なカテゴリ」自体がキー・コンピテンシーとして受け取られている。この「カテゴリ」の性格については、国別報告書のまとめにおいてTrier (2003)が指摘した「困難」を引き継いでしまっているようにも見える。

次に、「3つ」については、キー・コンピテンシーの体系化に関わるものであるが、この点も判然としなると言わざるを得ない。たしかに「3つ」のうちの1つひとつの内容について、その理論的な根拠を示すことは可能である。しかし、この3つが、Gilomen (2003)の言い方を用いれば、完結したものであり、他のカテゴリはないというだけの根拠にはなり得ない⁽⁷⁾。DeSeCoプロジェクトの資料を見る限り、唯一の説明は、この「3つ」が「生きるということ」

の「もっとも基本的なレベル」であるからというものとどまる。さらに「推測」するならば、DeSeCoプロジェクトを担当した連邦統計局のあるスイスを含むドイツ語圏の教育観が反映していると考えられる。しかし、これでは、たとえばその3つはなぜ「知・徳・体」ではないのか、と日本的に問われた場合に答えることはできないのではないかと。ただし、第2回シンポジウムの寄稿論文であるKeating (2003)は、DeSeCoプロジェクトに基づく代替案を示しており、そうした研究も含みこんだ形でその理論的根拠を再検討する余地はあると思われる。

以上の検討は、はじめに記したようにDeSeCoのホームページにある資料と刊行物に基づくものであり、資料的な限界はある。たとえば、当事者へのインタビュー等を実施すれば、その根拠は明らかになった可能性がある。しかし、刊行物等において検討されていないのであれば、それは「理論的・概念的基礎」を示したことになるであろう。

なお、本論では、キー・コンピテンシーの要にあるとされる「省察性」については検討の対象外とした。しかし、この「省察性」の方が、「現代社会の複雑な要請」に 대응するというDeSeCoプロジェクトのねらいに直結するものであり、この点は稿を改めて検討したい。

注

- (1) DeSeCoはOECDのプロジェクトであり、スイス連邦統計局(SFSO)が担当し、アメリカの全米教育統計センター(NCES)の支援を受けた。プロジェクトの委員長はスイス連邦統計局のH. Gilomen、マネージャーは同統計局のD. S. Rychenがそれぞれ務めている(OECD/SFSO 2001b:2,9)。
- (2) DeSeCoプロジェクトの資料については、同プロジェクトのホームページ(deseco.ch)に掲載されている。この他に、出版物を参照した。
- (3) キー・コンピテンシーの概要及び最終報告書については翻訳書があるが(立田慶裕監訳2006)、本論では、訳語の一貫性を保つため、翻訳書を参照しつつも、独自の訳を当てている。

- (4) 最終報告書の編者の一人である L. H. Salganik は2010年の論文において、DeSeCo は、(a)キー・コンピテンシーは人生の成功を導き社会の成功に貢献するためにすべての個人に必要とされるコンピテンシーであるという理解、(b)生活の共通の要請、(c)研究者の寄稿論文に基づき、キー・コンピテンシーの3要素のカテゴリーを開発した、と述べているが、それ以上の理論的根拠には触れていない (Salganik and Provasnik 2010: 255)。
- (5) ただし、最終報告書以降、2005年の概要が出されるまでの経緯については、本論文の参照した DeSeCo プロジェクトのホームページには何の資料も掲載されていないので、なぜ概要がこうした構成なのかは不明である。
- (6) ロートは、コンピテンシー (Kompetenz) の「3重の意味」として、①自分自身に対して責任を持った行動ができる能力としての自己コンピテンシー (Selbstkompetenz)、②事物諸領域に対する判断力や行動力を持ち、それとともにそれらに対する権限を持つことのできる能力としての事物コンピテンシー (Sachkompetenz)、③社会的・政治的に重要な事物的領域や社会的領域に対する判断力や行動力を持ち、したがって、それらに対する権限をも同様にもつことのできる能力としての社会的コンピテンシー (Sozialkompetenz) があるとしている (ロート 1976: 223)。なお、ロートの翻訳書 (平野正久訳) では“kompetenz”に「統轄能力」という訳語が当てられているが、ここでは訳語の統一を図るため「コンピテンシー」に改めている。
- (7) ちなみに、最終報告書の終章も H. Gilomen が執筆しているが、3つのカテゴリーの意義について全く触れていない。

参考文献一覧

- 今西幸蔵 (2008) 「キー・コンピテンシーと DeSeCo 計画」, 『天理大学学報』60(1)
- 奈良勝行 (2010) 「OECD コンピテンシー概念の分析と一面的「PISA 型学力」の問題点」『和光大学現代人間学部紀要』3
- 松下佳代編著 (2010) 『〈新しい能力〉は教育を変

えるか 学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房

- 宮嶋秀光 (2010) 「人格とキー・コンピテンシー—教育の目標概念に及ぼす DeSeCo プロジェクトの影響について—」『大学・学校づくり研究』2
- ロート (平野正久訳) (1976) 『発達教育学』明治図書
- 渡邊沙織 (2009) 「『キー・コンピテンシーの定義と選択』によるコンピテンシー概念に関する研究—“Key Competency”と“Meta Competency”の比較を中心に—」『生活科・総合的学習研究』7
- Canto-Sperber, M. and Dupuy, J.-P. (2001). Competencies for the Good Life and the Good Society. In Rychen, D. S. and Salganik L. H. (eds.) *Defining and Selecting Key Competencies*.
- Gilomen, H. (2003). Conclusions and next Steps. In Rychen, D. S., Salganik, L. H. and McLaughlin, M. E. (eds.) (2003). *Contributions to the Second DeSeCo Symposium*.
- Goody, J. (2001). Competencies and Education: Contextual Diversity. In Rychen, D. S. and Salganik L. H. (eds.) *Defining and Selecting Key Competencies*.
- Haste, H. (2001). Ambiguity, Autonomy, and Agency: Psychological Challenges to New Competence. In Rychen, D. S. and Salganik L. H. (eds.) *Defining and Selecting Key Competencies*.
- Keating, D. P. (2003). Definition and Selection of Competencies From a Human Development Perspective. In Rychen, D. S., Salganik, L. H. and McLaughlin, M. E. (eds.) (2003). *Contributions to the Second DeSeCo Symposium*, Swiss Federal Statistical Office.
- Lassnigg, L., Mayer, K. and Svecnik, E. (2001). *Definition and Selection of Key Competencies in Austria*.
- Levy, F. and Murnane, R. J. (2001). Key Competencies Critical to Economic Success. In Rychen, D. S. and Salganik L. H. (eds.) *Defining and Selecting Key Competencies*.
- National Agency for Education (2001). *Definition and Selection of Key Competencies in Sweden*.
- OECD (2002). *Definition and Selection of Competencies (DeSeCo): Theoretical and Conceptual Foundations Strategy paper*.

- OECD (2005). *The Definition and Selection of Key Competencies Executive Summary*.
- OECD/SFSO (1999). *DeSeCo Annual Report 1998*.
- OECD/SFSO (2000). *DeSeCo Annual Report 1999*.
- OECD/SFSO (2001a). *Definition and Selection of Competencies: Theoretical and Conceptual Foundations (DeSeCo) Annual Report 2000*.
- OECD/SFSO (2001b). *Definition and Selection of Competencies: Theoretical and Conceptual Foundations (DeSeCo) Background paper Revised December 2001*.
- OECD/SFSO (2002). *Definition and Selection of Competencies: Theoretical and Conceptual Foundations (DeSeCo) Annual Report 2001/spring 2002*.
- OECD/SFSO/NCES (1999). *Definition and Selection of Competencies, DeSeCo Symposium, Background Note*.
- Perrenoud, P. (2001). The Key to Social Fields: Competencies of an Autonomous Actor. In Rychen, D. S. and Salganik L. H. (eds.) *Defining and Selecting Key Competencies*.
- Rychen, D. S. (2001). Introduction. In Rychen, D. S. and Salganik L. H. (eds.) *Defining and Selecting Key Competencies*.
- Rychen, D. S. (2002). *DeSeCo Symposium: Discussion Paper*, OECD/SFSO.
- Rychen, D. S. (2003a). A Frame of Reference for Defining and Selecting Key Competencies in an International Context. In Rychen, D. S., Salganik, L. H. and McLaughlin, M. E. (eds.) (2003). *Contributions to the Second DeSeCo Symposium*.
- Rychen, D. S. (2003b). Key competencies: Meeting important challenges in life. In Rychen, D. S. and Salganik, L. H. (eds.) (2003). *Key Competencies for a Successful Life and a Well-Functioning Society*.
- Rychen, D. S. and Salganik, L. H. (2000) *Definition and Selection of Competencies, A Contribution of the OECD Program, Definition and Selection of Competencies (DeSeCo): Theoretical and Conceptual Foundations, INES General Assembly 2000*.
- Rychen, D. S. and Salganik, L. H. (eds.) (2001). *Defining and Selecting Key Competencies*, Hogrefe & Huber.
- Rychen, D. S. and Salganik, L. H. (2002). *DeSeCo Symposium —Discussion Paper*.
- Rychen, D. S., Salganik, L. H. and McLaughlin, M. E. (eds.) (2003). *Contributions to the Second DeSeCo Symposium*, Swiss Federal Statistical Office.
- Rychen, D. S. and Salganik, L. H. (eds.) (2003). *Key Competencies for a Successful Life and a Well-Functioning Society*, Hogrefe & Huber. (ドミニク・S・ライチェン, ローラ・H・サルガニク 編著 (立田慶裕監訳) 『キー・コンピテンシー国際標準の学力をめざして』明石書店, 2006年)
- Salganik, L. H. and Provasnik, S. J. (2010). The Challenge of Defining a Quality Universal Education : Mapping a Common Core, In Cohen, J. E. and Malin, M. B. (Eds.). *International perspectives on the Goals of Universal Basic and Secondary Education*, Routledge.
- Trier, U. P. (2001a). *Definition and Selection of Key Competencies in Switzerland*.
- Trier, U. P. (2001b). *12 Countries Contributing to DeSeCo: A Summary Report*, SFSO/DeSeCo.
- Trier, U. P. (2003). Twelve Countries Contributing to DeSeCo: A Summary Report In Rychen, D. S., Salganik, L. H. and McLaughlin, M. E. (eds.) (2003). *Contributions to the Second DeSeCo Symposium*.
- Witt, R. and Lehmann, R. (2001). *Definition and Selection of Key Competencies in Germany*.

(論文受理日：2017年8月7日)

A Study on the Theoretical Foundations of Key Competencies of OECD Focusing on “Three Categories”

Hodaka FUJII

Today, competencies-based policies from elementary school education to higher education have been advocated, demonstrating a significant influence on educational policy in Japan. Subsequently, OECD's key competencies have been frequently referred to. On the other hand, in the process of formulating these key competencies, many questions and criticisms have been expressed about the key competencies international relevance. Therefore, the question is how have the key competencies been created? In this paper, I focus on the “three categories” of competencies, and look to study the theoretical foundations.

First, I outline the key competencies, and then review the background on examination of these key competencies. Then, I examine the theoretical foundations of the key competencies.

The results of examination in this paper are as follows.

First, if we look at the key competencies “category”, initially, the three categories collectively were originally described as “generic” key competencies, but gradually they came to be defined as “broad categories”. But these “categories” do not refer to areas that contain key competencies such as “clusters”, but they can be read as if key competencies by themselves. Indeed, when referred to, “three broad categories” themselves are received as key competencies.

Next, regarding “three”, it relates to systematization of key competencies, but this point is also not clear as to why there are three categories. Indeed it is possible to show theoretical foundations for the content of each of the “three”. However, these cannot be just foundations for not presenting any other categories. As far as the DeSeCo project documentation is concerned, the only explanation is that these “three” are the “most basic level” of “living”. Further “estimating”, it seems that the viewpoint of the German-speaking region including Switzerland with the Federal Statistical Office responsible for the DeSeCo project is implicitly reflected.